鶴城中だより

文責
校長
船津　巧

No. 8

自分自身に誇りを

自己肯定感とは、「自分が、誰かに必要とされている」と、自らの価値や存在意義を肯定できる感情のことである。自分の良いところも悪いところも含めて自分のすべてを肯定できる前向きな感情といっても良い。自己肯定感が高ければ、自分に自信があり、何事にも挑戦していくことができるようだ。

古代ギリシャの寓話に三人の石切職人の話がある。

『昔、一人の旅人が、石を運んでいる石切職人たちに出会い、何をしているのか聞いたところ、一人目の職人は、何を当たり前の事を聞くのだと、つまらなそうな顔をしてぶっきらぼうに答えた。

「見りゃわかるだろう、石を運んでいるんだ。お金を稼ぐためさ。」とてもイライラした表情だった。

旅人は、二人目の石切職人にも、同じ事を尋ねた。職人は汗を拭いながら答えた。「この大きくて固い石を切りだす為に悪戦苦闘しているのさ」無表情だったが、イライラした表情ではなかった。

三人目の石切職人は、目を輝かせ、とても嬉しそうに張りのある声で、「人々の心の安らぎの場となる教会を造っている。私は、その素晴らしい教会を夢見て石を切り出している。」と答えた。』

この寓話のように、同じことをしていても、自分自身の意味合いや価値を何につなげるかによって、気持ちや行動は違ってくる。

自己肯定感は、成功体験の積み重ねと周りの者からの賛辞やお礼によりどんどん高まるはずだ。鶴城中の生徒は、何度も地域の催しに参加させてもらっている。「よさこいソーラン」や作品展示など。賞賛の言葉により、生徒の意欲は一層向上していく。ありがたいことだ。

今年度の目指す学校像は

みんなが「来たいと思う学校」
みんなが「期待する学校」
みんなを「鍛える学校」
みんなの「記憶に残る学校」

今年度も半分以上が過ぎてしまいました。この目指す学校像の**みんな**とは「生徒たち」「保護者や地域の皆さん」「先生たち」を指しています。鶴城中学校に関わる人たち**みんな**が、このように思える学校にしたいと取り組んできました。

生徒たちは、5月の体育大会に始まり、6月の中体連大会、夏休み期間中の各種行事、中体連陸上や駅伝、文化祭などたくさんの行事に全力で取り組み、一回りたくましくなったようです。

行事の度に、「素晴らしかったですね」というお誉めの言葉を聞きました。

地域の行事への参加を含め、小さい学校であるが故に何度も出番があります。授業においても、毎時間、何度も発表の機会があります。生徒たちの充実した毎日です。その頑張りを学校のホームページで紹介しています。

駅伝大会 女子4位

山鹿市内6校が参加して開催された中体連駅伝大会で、女子は4位でした。必死で襷をつなごうとする本校生の頑張りを見ることができました。

先生方に感謝

生徒の学力向上は、私たち教職員にとって一番の願いです。

鶴城中には、朝早く(5時前)から学校に来て授業の準備をしている先生がいます。夜遅く(9時過ぎ)まで採点をしたり、授業の準備をする先生もいます。少しでもわかりやすい授業にし、学力を向上させるために努力するのは、先生にとって当たり前のことです。

11月17日、熊日新聞の「学校リスクのいま」という特集記事に部活動指導のことが載っていました。

世界34の国と地域の中学校教員を対象に行った調査によると、日本の教員の勤務時間は週平均約54時間で、参加国平均よりも15時間多いそうです。特に、部活動を含む「課外活動」は、参加国平均約2時間に対し、7.7時間が日本だそうです。本校の先生方にも、部活動指導をお願いしています。平日の夕方ばかりでなく、土曜日や日曜日にも部活動があります。当然、教材研究は夜遅くになったり、早朝になります。4月に部活動の顧問をお願いしたときに、「その部活はしたことありません」と言われた先生が多くいました。そのような先生に部活動の指導をお願いしています。文句どころか、本を購入し、そのスポーツの指導を学んで頑張っておられます。そして月90時間以上の時間外の勤務につながった先生もいます。時間外手当は出ません。つまり、部活動指導は、ほぼボランティアです。そんな先生たちに、頭が下がります。ありがたいことです。感謝、感謝です。

最後に、「休みは取ってください」「病気をしないように」「家族も大切に」という言葉を付け加えておきたいと思います。

鶴城の誇れ

ソフトテニス部やバレー部など部活動での活躍ばかりでなく、こども芸術祭での眞﨑くんの短歌、河津さんの少年の主張県大会での発表、北部地区音楽会での全員合唱など素晴らしい活躍を見せてくれています。